

令和6年度 特別展

NEW!!

お札の  
誕生祭

～新しいお札がやってきた!～  
THE NEW BANKNOTE'S STORY



独立行政法人国立印刷局

お札と切手の博物館  
Banknote and Postage Stamp Museum

解説書

# 新しいお札がやってきた！

令和6年7月3日(水)に新しいお札が発行されました。20年振りに新しくなったお札とはどのようなものでしょうか。これから見ていきましょう。

## 新しいお札の発表

新しいお札が発行されることを<sup>かいさつ</sup>改刷といいます。

今回の改刷は、平成31(2019)年4月9日に財務大臣によってデザインイメージとともに発表されました。

前のお札は改刷の発表から発行開始までの期間が2年間だったのに比べ、今回は発行までに5年間という、準備と製造に十分な期間を設けています。

令和5(2023)年12月15日付けの官報では、発行開始日や最終的なデザインなどが掲載され、公的に国民へ伝えられました。



改刷の発表をする麻生財務大臣(当時)

## 改刷の目的

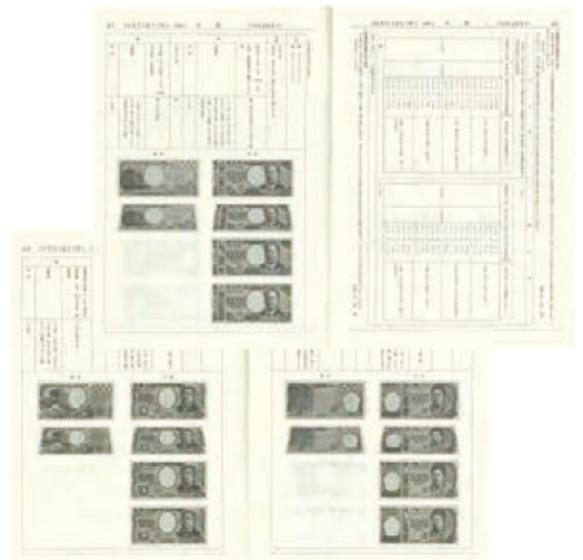
下のグラフは、日本で発見された偽札の枚数の動きを表したものです。

グラフでは、前のお札が発行された平成16年以降、それまで多かった偽札の数が急激に減っています※。これは、昭和59(1984)年に発行されたお札が20年使い続けられた結果、その間に広く使われるようになったカラーコピー機やスキャナーなどの複写機器を使った偽札が多く出回るようになりましたが、改刷によってそれが抑えられたことを表しています。

このように、お札の流通期間が長くなると、その間に発達した技術を悪用して偽札が作られてしまう可能性が高まります。そのため、最新の偽造防止技術を使った新たなお札を定期的に発行することにより、偽札を作らせないようにしています。

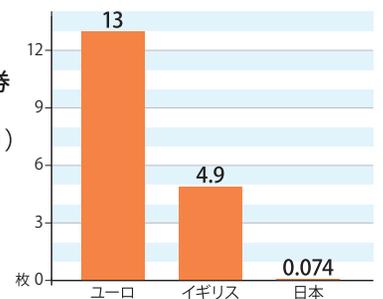
日本は、世界の主要国と比べて発見される偽札の数が圧倒的に少ない状態が続いています。このことは、日本のお札が信用のおけるものであることを表しています。

※平成19(2007)年に偽札の発見数が多くなっているのは、特定の自動販売機を狙った偽千円券を使う事例が一時的に増えたことによります。



官報号外第263号 財務省告示第314号(部分)

(参考)  
諸外国との  
2022年の偽造券  
発見数比較  
(100万枚当たり)



各国中央銀行ホームページより作成

## (グラフ) 日本銀行券の偽造発見枚数



警察白書より作成

# 新しい1万円の顔、渋沢栄一

## 業績

渋沢栄一は、多くの企業の設立に携わった実業家で、日本近代社会の創造者とされています。

武蔵国榛沢郡はんざわ(現埼玉県深谷市)で養蚕や藍栽培を営む農家に生まれ、子供のころより家業を手伝い、商売を学びました。周囲の影響を受け、江戸に遊学して見聞を広め、倒幕運動に参加するようになりますが、幕府に仕えるようになります。

明治維新後は明治政府に招かれ、度量衡の制定や租税・貨幣制度の改正、鉄道の敷設などに携わりました。そして、大蔵省に創設された紙幣寮しへいのかみ(現国立印刷局)の初代紙幣頭(最上位の役職)にもなっています。

渋沢栄一は、海外の例を参考として銀行の設立を目指して国立銀行条例を起草し、豪商を発起人とした国立銀行を開業させました。明治6(1873)年に大蔵省を辞してのち、実業家として約500社の会社の創立や支援に関わり、その種類も多岐にわたっています。

幼少に学んだ『論語』の教えに従い、会社の利益のみを追及するのではなく、社会全体の利益に資することを目的として事業経営を行うほか事業で得た利益を慈善事業や教育事業に活用するなど、多大な社会貢献をしました。

## お札の肖像

お札の肖像の元となった写真は、渋沢栄一が70歳の時に撮影したものです。お札の原版彫刻の参考とするために描く肖像下図は、この写真を元に明暗の調子を整えるとともに口角の上がった頬に張りのある若々しい顔に描いています。

スタンプを  
押して

お札の裏面に描かれた  
モチーフを入れてみよう!



新10000円札



肖像下図



元の写真  
写真: 渋沢史料館所蔵

## 年表

- 天保11(1840)年 武蔵国榛沢郡の豪農渋沢市郎衛門の長男として誕生。
- 文久 元(1861)年 江戸遊学。
- 文久 3(1863)年 従兄弟の尾高惇忠らと倒幕を計画するが中止する。
- 慶応 2(1866)年 幕臣となる。
- 慶応 3(1867)年 徳川昭武に随行し、ヨーロッパへ。
- 明治 2(1869)～6(1873)年 明治政府に奉職し、度量衡の制定や国立銀行の設立に携わる。
- 明治 4(1871)年 初代紙幣頭に就任。
- 明治 6(1873)年 抄紙会社設立。大蔵省を辞職。第一国立銀行総監役に就任。
- 明治 8(1875)年 第一国立銀行頭取となる。
- 明治18(1885)年 日本郵船会社・東京瓦斯会社設立。
- 明治20(1887)年 東京ホテル(現帝国ホテル)創立。
- 明治21(1888)年 札幌麦酒会社創立。東京女学館開校。
- 明治22(1889)年 石川島造船所創立。
- 明治37(1904)年 病気のため長期静養。
- 明治39(1906)年 東京電力株式会社創立。
- 明治40(1907)年 帝国劇場株式会社創立。
- 明治42(1909)年 古希に際し実業界を引退。
- 大正15(1926)年 社団法人日本放送協会創立。
- 昭和 2(1927)年 日本国際児童親善会創立。
- 昭和 6(1931)年 死去。

# 新しい5千円の顔、津田梅子

## 業績

津田梅子は、日本の女子高等教育に力を尽くした人物です。

わずか6歳という幼少のころに日本最初の女子留学生の一人として渡米し、語学を始めピアノや自然科学を学びました。11年間の留学を終えて帰国した時には、日本語をすっかり忘れてしまっていたといいます。

帰国後、アメリカで受けた教育を日本に還元する場は用意されておらず、一緒に渡米した岩倉使節団の一員であった伊藤博文の提案により住み込みの家庭教師となりました。後に伊藤の推薦で華族女学校の職を得ます。津田梅子は、当時の日本女性の置かれた立場を目の当たりにしてその地位向上の必要性を強く感じ、女子のための学校を作るという思いを抱きます。

華族女学校に在職のまま再度渡米し大学で生物学や教授法を学びました。帰国後は、日本の女学生の援助や日本の女子教育についての講演を行うなど積極的に活動をし、明治33(1900)年に女子英学塾(現津田塾大学)を開校しました。女子英学塾は、身分を問わず、個性を大事にした少数教育を行い、専門性を養う女子高等教育機関として現在に至っています。

## お札の肖像

お札の肖像の元となった写真は、女子英学塾の開校を控えた、津田梅子が35歳のころに撮影されたものです。

肖像下図では、お札のデザインに合わせて肖像の顔を写真とは逆向きに描いています。襟元を整えたうえ、瞳に光を入れまっすぐなまなざしの凛とした表情を描いています。

スタンプを  
押して

お札の裏面に描かれた  
モチーフを入れてみよう!



肖像下図



元の写真

写真:津田塾大学津田梅子資料室所蔵

## 年表

- 元治元(1864)年 江戸幕府の通訳であった津田仙<sup>せん</sup>の次女として誕生。
- 明治 4(1871)年 開拓使が派遣する官費女子留学生の一人として岩倉使節団とともに渡米。ワシントン郊外のアメリカ人の家庭に寄宿し、初等・中等教育を受ける。
- 明治 6(1873)年 キリスト教の洗礼を受ける。
- 明治15(1882)年 アメリカより帰国。
- 明治16(1883)年 伊藤博文家の住み込みの家庭教師となる。
- 明治18(1885)年 華族女学校(現学習院女子中・高等科)の英語教師となる。
- 明治19(1886)年 同校教授となる。
- 明治22(1889)年 再度留学のため渡米。プリンマー大学で生物学を専攻。また、オズウィーゴ師範学校で教授法を学ぶ。この時、日本女性のための奨学金制度を設立。
- 明治25(1892)年 帰国。華族女学校に復職。
- 明治31(1898)年 女子高等師範学校(現東京女子大学)教授を兼任。
- 明治33(1900)年 華族女学校、女子高等師範学校を辞任し、女子英学塾(現津田塾大学)を開校。
- 明治38(1905)年 日本基督教女子青年会(日本YWCA)の会長となる。
- 昭和 4(1929)年 死去。

# 新しい千円の顔、北里柴三郎

## 業績

北里柴三郎は、日本を代表する微生物学者で、近代日本医学の父と呼ばれています。

熊本県阿蘇郡小国町の庄屋の長男に生まれ、幼少より親戚に預けられて漢籍や国書などの教育を受けました。

18歳の時に語学の習得のため入学した医学校の外国人教師の勧めで医学を志すこととなります。明治7(1874)年に上京し、東京医学校へ入学、卒業後は内務省衛生局へ就職しました。

内務省に勤務していた明治19年に国費でドイツのベルリン大学へ留学します。大学では、細菌学の第一人者であったコッホ博士に師事し、研究に取り組みました。明治22年に世界で初めて破傷風菌の純粋培養に成功し、翌年には破傷風菌の出す毒素を中和する破傷風免疫体を発見するという業績を上げるとともに、これを活用した免疫療法を確立し、戦時中の負傷兵に対する破傷風の発症予防に寄与しました。

また、明治27年にはペストの原因調査のために派遣された香港でペスト菌を発見しています。

北里柴三郎は、細菌学上、多大な功績を上げただけではなく、伝染病予防のための啓蒙活動も積極的に行い、伝染病の撲滅に取り組みました。北里柴三郎が指導した研究者には、顕著な業績を上げた志賀潔や野口英世がおり、後進育成の点でも日本医学界の発展に貢献しました。

## お札の肖像

お札の肖像の元となった写真は、55～57歳のころに撮影されたものです。

スタンプを  
押して

お札の裏面に描かれた  
モチーフを入れてみよう!



新1000円札



肖像下図



元の写真

写真提供: 学校法人北里研究所  
北里柴三郎記念博物館

## 年表

- 嘉永 5(1853)年 肥後国阿蘇郡小国郷北里村(現熊本県阿蘇郡小国町)の庄屋の家に誕生。
- 慶応 2(1866)年 熊本の儒学者田中司馬の塾に入門。
- 明治 4(1871)年 古城医学所(現熊本大学医学部)に入学。
- 明治 7(1874)年 東京医学校(のちに東京大学医学部に改称)に入学。
- 明治16(1883)年 東京大学医学部卒業。内務省衛生局に奉職。
- 明治19(1886)年 ドイツに渡り、ベルリン大学のコッホ博士の下で細菌学を研究する。
- 明治22(1889)年 世界で初めて破傷風菌の純粋培養に成功。
- 明治23(1890)年 破傷風免疫体を発見、免疫のある血清を使った治療法の基礎を確立。
- 明治25(1892)年 ドイツより帰国。伝染病研究所の所長となる。
- 明治27(1894)年 香港で流行したペストの原因調査においてペスト菌発見。
- 大正 3(1914)年 伝染病研究所が内務省から文部省の管轄になり、所長を辞任。私財を投じて北里研究所を設立し、所長となる。
- 大正 6(1917)年 慶応義塾大学部医学科を設立、初代医学科長となる。
- 大正12(1923)年 日本医師会を創設、初代会長となる。
- 昭和 6(1931)年 死去。

# お札の肖像の移り変わり

日本のお札の肖像は、偽造防止のために採用されました。そのほか、国民に愛国心やお札への親近感を持ってもらうという目的もあります。そして、肖像からは各時代の価値観を知ることができます。

## 戦前

外国のお札に倣って、日本のお札に肖像が初めて採用されたのは、明治14(1881)年の改造紙幣1円(図①)です。細かい線で人物の顔を描くことによって模倣を難しくするとともに、少しの違いでも表情が変わって見えるため偽札かどうかわかりやすいということから、偽造防止の一環として採用されました。肖像は、朝鮮半島に遠征に行ったという逸話を持つ神功皇后じんくうこうこうです。

この次に肖像が描かれたのは、明治21年から24年にかけて発行されたお札で、明治20年の閣議でお札の肖像候補として決定された、天皇制のもと国家に忠誠を尽くした人物(図②)のなかから肖像が選ばれています。

## 戦後

終戦後、お札の製造にはGHQ(連合軍最高司令官総司令部)の認可が必要でした。日本の非軍事化をすすめるGHQは、それまでの肖像候補者を軍国主義の象徴とし、戦後まもなく発行されたお札の肖像は、聖徳太子を除いて認可しませんでした。印刷局では、彼らに代わる候補者をGHQに申請し、聖徳太子、岩倉具視いわくら ともみ、大久保利通おおく ぼ としみち、福澤諭吉ふくざわ げきち、二宮尊徳にのみや さんとく、貝原益軒かいばら えきけん(江戸時代の博物学者)、板垣退助いたがき たかよし、木戸孝允きのと かつゆん、野口英世のぐち へいせい、青木昆陽あおき こんよう(江戸時代の儒学者)、夏目漱石なつめ そうせき、吉原重俊よしはら しげとし(日本銀行初代総裁)の12名について認可を得ています。これらの人物(図③)は、GHQの認可が必要なくなった後のお札でも肖像に選ばれています。

## 文化人の登場

昭和59(1984)年に発行されたDシリーズのお札から、肖像に文化人(図④)が採用されます。これは、世界的な傾向を反映したものとされており、広く一般に知られていること、国際的にも優れた業績により知名度が高いこと、品位があることに加え、製造や偽造防止の観点から顔の表情や陰影等に特徴があり、彫刻しやすい顔であること、そして、はっきり顔が写っている写真が現存していることも条件となります。

図①最初に肖像が採用されたお札



改造紙幣1円 明治14(1881)年



じんくうこうこう  
神功皇后

図② 戦前に肖像候補として選ばれた人物



しょうとくたいし  
聖徳太子



わけのきまろ  
和気清麻呂



ふじわらのかまつり  
藤原鎌足



たけのうちのすくわ  
武内宿祢



すがわらのみちざね  
菅原道真



やまとたけらのみこと  
日本武尊

図③ 戦後、肖像となった人物



しょうとくたいし  
聖徳太子



にのみやさんとく  
二宮尊徳



いたがきたいすけ  
板垣退助



いわくらともみ  
岩倉具視



いとうひろぶみ  
伊藤博文



たかはしこれきよ  
高橋是清

図④ 文化人



ふくざわ ゆきち  
福澤諭吉



なつめ そうせき  
夏目漱石



に と べい なる  
新渡戸稲造



ひぐちいちよう  
樋口一葉



のぐちひでよ  
野口英世



わたなべ しょういち  
渡沢栄一



つくだ めい  
津田梅子



きたむら たるお  
北里柴三郎

# 新しいお札の特徴は？

新しいお札には、これまでのお札には見られない技術やさらに高度化した技術が使われています。それはどのようなものなのでしょうか。

## 世界初！の採用例

お札に採用されたのは新式のホログラムです。そして、今回、初めて千円にもホログラムが採用されました。

このホログラムの形は、1万円と5千円はストライプ型、千円はパッチ型となっています。

ホログラムの肖像は、立体的に見えるほかお札を傾けると顔の向きが変わります。海外でも立体的なホログラムが使われているお札は多くありますが、この回転する技術(3Dホログラム)がお札に使われるのは、日本が世界で初めてとなります。

また、ストライプ型のホログラムの額面数字や桜などの模様についてもお札を傾けると連続的に変化し、前のお札に採用されていた3種類の模様を切り替わるホログラムとは性質が異なります。

このように模様に変化して見えるホログラムは、現在の複製技術に対して偽造防止効果があります。

今回、より高性能のホログラムを採用することで偽造防止対策を強化しています。



## さらに極められた技

高精細すき入れは、肖像すき入れの背景に入れられた細かい幾何学模様のことです。

すき入れは、明治時代に国立印刷局が開発した紙に施す白黒すき入れという技術で、紙の厚さを調整することで写真のような微妙な明暗を表現することができます。

お札の肖像のすき入れは、この白黒すき入れによるものですが、新しいお札ではこれをさらに発展させ、肖像の背景に非常に細かい模様を加えられています。お札にすき入れを採用するのは、すき入れが光に透かした時に図像が現れることから、カラーコピー機やスキャナーなどの複製機器ではこれを再現することができないためです。

今回、高精細すき入れが加わることで、お札をさらに偽造しにくいものとしています。



# お札のユニバーサルデザインとは？

新しいお札には、どんな立場の人でも使いやすくするための工夫が多く取り入れられています。

## 識別マーク

識別マークは、お札を区別しやすくするためのマークです。指で触ってわかりやすいよう、インキが盛り上がり紙に印刷される凹版印刷という印刷方式で印刷されています。

ところで、日本では昭和59(1984)年発行のお札で初めて識別マークが採用されました。その時のマークはすき入れによる世界的にも特殊なもので、このような例は、このお札のみとなっています。

新しいお札の識別マークの形状は、前のお札が券種ごとに異なる形が印刷されていたのに対し、全券種11本の斜線に統一され、そして、券種ごとに異なる位置に印刷されています。

凹版印刷の斜線による識別マークは、世界各国で採用されていますが、その斜線のパターンなど国によって様々なものが見られます。

## 肖像すき入れの位置

この識別マーク以外にも券種の区別をしやすくする工夫として、肖像すき入れの位置を各券種で変えています。その他、肖像すき入れの形も1万円は円形、5千円は角丸の五角形、千円は卵型と、券種により異なるものとしています。

## 額面表示の大型化

これまで額面を漢字で大きく表示していたのをアラビア数字による表示に替えています。これは裏面の額面表示で顕著であり、前のお札に比べて大きな表示となっています。

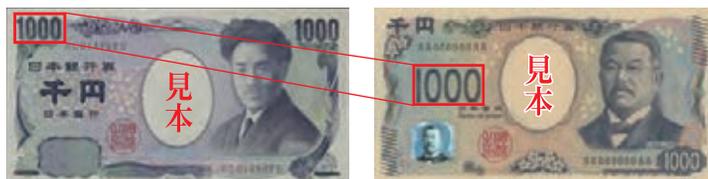
これにより外国人や子供に対してもお札を区別しやすいようになっています。



青枠は識別マークの位置、赤枠はすき入れの位置



(参考)平成16(2004)年発行のお札の識別マーク  
左から1万円、5千円、千円



千円の表面の額面数字の大きさ  
(左)平成16(2004)年発行 (右)令和6(2024)年発行



5千円の裏面の額面数字の大きさ  
(左)平成16(2004)年発行 (右)令和6(2024)年発行



(参考)200ユーロの識別マーク

# 1万円・5千円ものごと

1万円・5千円は、同時期に誕生し、現在まで高額券として使用されています。

1万円と5千円は、昭和30年代に発行されたCシリーズで初めて登場した額面のお札です。これら(図①・④)は、神武景気と呼ばれる好景気の経済状況下で発行されました。

仕様上の大きな特長は、紙に印刷しない空欄を作り、その中にすき入れを配置している点です。このような例は明治43(1910)年に発行された乙5円ですでに採用されていました。しかし、紙の空白部分が脆弱なことや印刷漏れとの誤解を受けたことからしばらく採用されていませんでした。

これらのお札を製造するにあたって、当時、写真技術を使った精巧な偽札が発見されたことから、海外の銀行券を参考とし、改めて紙に空白を設け、そこに精巧なすき入れを入れることとしました。さらに、ザンメル印刷やレインボー印刷という、線の途中から色が変化するようにずねなく印刷できる多色刷の技術を新規導入して、写真技術による偽造防止対策を講じました。

Dシリーズ(図②・⑤)は、C1万円の発行から26年、C5千円の発行から27年経過し、流通期間の長期化に伴い、その間に発達した印刷技術やカラーコピー機の急速な普及によって偽造の恐れが高まったことを受けて昭和59(1984)年に改刷されたお札です。

そのほかD1万円、D5千円は、省資源や製造の効率化のための小型化、主体色の設定や識別マークの導入のほか、ATMなど自動販売機などの普及を見据えた機器に対応できるように設計されました。偽造防止技術としては、超細密画線による肖像及びすき入れの大型化が図られました。このシリーズは、カラーコピー機による偽造が増加したために、その対策として平成5(1993)年に千円と同様に偽造防止対策強化のための改刷が行われました。

この改刷では、コピー機では再現できないマイクロ文字のほか特殊発光インキが新規技術として加わりました。

そして、平成16年に発行されたEシリーズ(図③・⑥)では、進化した複写機器を利用した偽造に対抗するために、従来の技術に加え、複写機器で再現できない、お札を傾けると色や図柄が変化して見える特徴を持つホログラム(1万円・5千円のみ採用)、潜像模様、パールインキといった技術が新規に採用されています。

図①



日本銀行券C5000円 昭和32(1957)年

図②



日本銀行券D5000円 昭和59(1984)年

図③



日本銀行券E5000円 平成16(2004)年

図④



日本銀行券C10000円 昭和33(1958)年

図⑤



日本銀行券D10000円 昭和59(1984)年

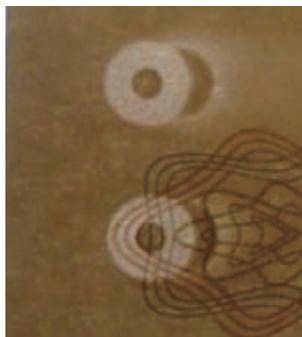
図⑥



日本銀行券E10000円 平成16(2004)年



C1万円表面のザンメル印刷部分



D5千円のすき入れによる識別マーク

# 千円ものごと

新千円は、昭和20(1945)年に初めて登場してから、6代目※となります。  
ここではその移り変わりを見ていきましょう。

※不発行を除く

日本のお札で最初に千円が登場したのは、昭和20年発行の甲千円(図①)です。

このお札は、昭和12年以降、日中戦争による軍事費の拡大などによってお札の需要が急激に増大したことから、時局に備えるために昭和13年に製造が決定されたものです。しかし、このお札が実際に発行されたのは、太平洋戦争終結後となりました。しかし、戦後のインフレーションの対策として行われた新円切り替えによって、1年に満たず、通用停止となっています。

甲千円に続いて発行されたのは、昭和25年発行のB千円(図②)です。このお札は、当時流通していたお札のほとんどが当時最高額面の100円札であったことから、現金取り扱いの際の不便を解消するためや戦後のインフレーションが鎮静化したことで高額券を発行しても心理的に抵抗がないと判断されたため、製造が決まりました。

偽造防止対策として白黒すき入れが入った用紙に凹版印刷が主体の図柄を印刷したものでしたが、製造技術面で大量生産に不向きな点があったことや、流通期間の長期化によって偽造の恐れがあり、改刷が検討されていたところ、昭和36年にこの千円の精巧な偽札が発見されてしまいます。昭和38年までの2年間に全国で343枚の偽札が見つかったことから、改刷が急がれることとなりました。

この過去最大の偽造事件といわれたチ-37号事件を受けて新しく発行されたのがC千円券(右図③)です。このお札は、画線の途中で色が変わって印刷されるザンメル印刷のほか、刷り合わせに精度を要する当時最新の多色印刷技術の導入によって、偽造防止効果の向上を図ったものでした。

C千円の後継のD千円(右図④)は、C千円の流通が長期化したために偽造される可能性が高くなったことから、新しく発行されたお札です。当時、普及しつつあったATMや自動販売機での使用も視野に入れて設計されました。カラーコピーや写真製版技術による偽造に対抗して、中間色を主体とした微細線による図柄を採用しています。印刷技術の発達に応じ、平成5(1993)年には偽造防止技術にマイクロ文字と特殊発光インキが加わり、さらに偽造防止対策が強化されました。

E千円(右図⑤)についてもカラーコピー機やスキャナーなどの複写機器を使って、個人が安易に偽造するケースが増加したことから、複写機器で再現が困難なように色や図柄が変わって見える技術(パールインキ、潜像パール模様など)が高額券と同様に新たに採用されたのが特徴です。

※日本銀行券の名称に付されているアルファベットは、昭和21年以降に発行されたお札を分類するために付けられた記号です。

図①



日本銀行兌換券甲1000円 昭和20(1945)年

図②



日本銀行券B1000円 昭和25(1950)年

図③



日本銀行券C1000円 昭和38(1963)年

図④



日本銀行券D1000円 昭和59(1984)年

図⑤



日本銀行券E1000円 平成16(2004)年

# 最高額面の移り変わり

現在使われているお札の3券種は、すべて戦後に登場した額面です。それぞれ、発行時には最高額面として誕生しました。

歴史を振り返ると、最高額面としての存続期間(一部期間除く)は、100円が明治5(1872)年から昭和24(1949)年までの延べ50年以上と一番長く、最短は5千円の1年2か月間です。最高額面の推移を見てみると、戦後に頻繁に推移していることが分かります。

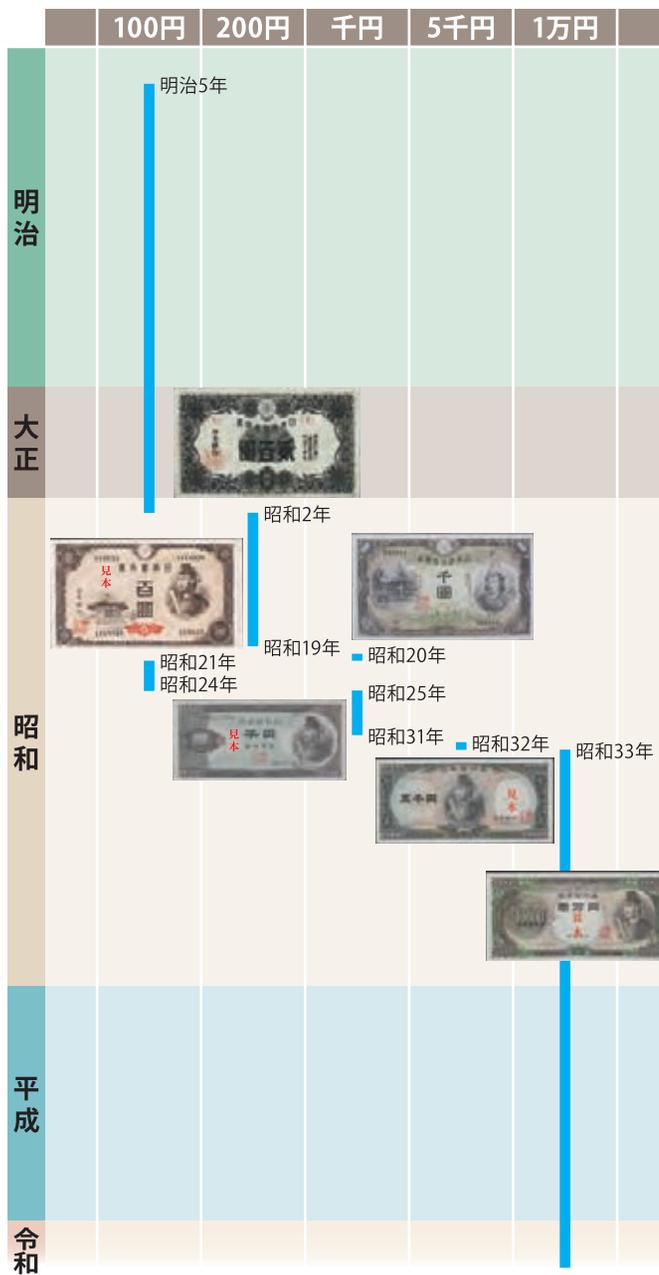
千円は、非常時用の高額券として昭和20年に発行されました。まもなく戦後インフレーションによる新円切り替えによって通用停止となり、改めて発行される昭和25年までの一時は100円が最高額面として流通していたものの、戦後から現在まで75年間通常券として使用されてきています。しかし、最高額券であったのは、C5千円が発行されるまでの7年間という短い間でした。

C5千円・C1万円の発行が検討され始めたのは、昭和28年のことです。戦後のインフレーションの影響下で当時流通するお札の券種のうち千円が高い割合を占めていたことによるものです。しかし、インフレーションを助長するという意見があり、一度見送りとなっていたものの、大口決済における便宜を図り、銀行事務を簡略化するために昭和30年に正式に発行が決定されました。

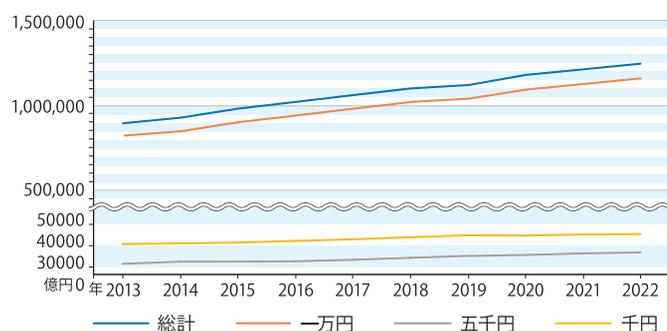
高額券の発行の決定は、その時の最高額面のお札が流通高に占める割合が一つの判断材料となります。例えば、B千円の発行の際には、100円が全体の96.3%、C5千円の発行時には、千円が86.7%、C1万円の発行時には、千円と5千円で87.9%を占めていました(第84回国会参議院予算委員会第10号昭和53年3月14日)。

高額券が日本のお札の流通高に占める割合が引き続き高水準を維持していたため、昭和50年代を中心に、さらなる高額券の発行の可能性について多くの質疑が国会で行われました。政府は、経済状況の安定や国民の高額券に対する需要の動向、インフレーションへの懸念という心理的悪影響など、様々な観点から検討したうえで決定するものであるという見解を示し、高額券の発行は否定的でした。そして、平成時代にはデフレーション下にあった当時の経済状況により高額券の発行についての論議が途絶し、現在も1万円の流通高は他の券種に比べて流通割合が非常に高い状況が続きながらも高額券の発行に至っていません。

## 日本のお札の最高額面の推移



## 日本銀行券の流通高



総務省統計局『日本の統計2024』より作成

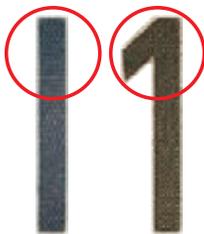
## お札クイズの答え

### クイズ 1

これは新しい1万円と千円のある部分です。  
どちらが何円のお札？

答え

1の文字が縦線のように見えるのは、新千円  
(左)で、1の文字の頭が折れているのが新  
1万円(右)です。これらの文字のデザインの  
違いも偽造防止に役立てられています。



### クイズ 2

お札を触って区別するための識別マーク。  
日本の識別マークはどれ？

正解は②

- ① アルゼンチン5ペソ(2015年)の識別マーク
- ② 日本銀行券F10000円(2024年)の識別マーク
- ③ 200ユーロ(2019年)の識別マーク

日本の識別マークは、指で触るとざらざら  
するように、インキが盛り上がり紙に写る方法で印刷されて  
います。また、斜線(11本)の位置を券種ごとに違うものとする  
ことで、お札を触って券種を区別できるようにしています。



### クイズ 3

1万円・5千円・千円のお札には、「マイクロ文字」といって「NIPPON  
GINKO」の文字が表裏各3か所に印刷されています。下の画像には  
2か所のマイクロ文字の場所を青枠で示しています。  
残りの1か所はどこでしょうか。ルーペで探してみましょう。

答え

赤枠が残りの1か所です。



### 【参考文献】

「特集 新しい通貨」『ファイナンス』2021年6月号 財務省

「新日本銀行券印刷開始式について」『ファイナンス』2021年10月号 財務省

「特集 新しい紙幣・硬貨発行の意義と最新技術」『ファイナンス』2019年6月号 財務省

公益財団法人 渋沢栄一記念財団 渋沢史料館 『渋沢栄一検定公式テキスト』 実業之日本社 2021

河合敦 『お札に登場した偉人たち21人』 あすなろ書房 2022

植村峻 『紙幣肖像の近現代史』 吉川弘文館 2015

大蔵省印刷局 『大蔵省印刷局百年史』第3巻 1974

大蔵省印刷局 『日本銀行券製造100年 歴史と技術』 1984

日本銀行調査局編 『図録日本の貨幣』第9巻 東洋経済新報社 1975

武田晴人 『日本経済史』 有斐閣 2019

### 【インターネット】

公益財団法人 渋沢栄一記念財団ホームページ

津田塾大学ホームページ

学校法人北里研究所北里柴三郎記念博物館ホームページ

総務省統計局ホームページ

内閣府ホームページ

イングランド銀行ホームページ

欧州中央銀行ホームページ

警察庁ホームページ

令和6年度 特別展

お札の  
**誕生祭**  
2024年  
I期 7月3日(水)～9月1日(日)  
II期 9月3日(火)～12月22日(日)  
～新しいお札がやってきた!～

発行日 令和6年7月3日

編集・発行 独立行政法人国立印刷局 お札と切手の博物館

〒114-0002 東京都北区王子1丁目6-1

TEL 03-5390-5194

本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。